

と述べ、関与を否定した。これに対し

県北部で見つかった新種のアルマジロは

# 谷山怜氏死去

## 東洋のバンクシーの異名

画家の谷山怜(たにやま・れい)さんが7日、都内の自宅で老衰のため死去していたことが分かった。70歳だった。APF通信が家族の話として伝えた。

谷山さんはイギリス生まれ。6歳で来日する。W大学中退後に世界を転々としながら作品を発表し、晩年は日本を拠点に活動した。

匿名性の高い作品が特徴で、専門家の間では「東洋のバンクシー」と称され、世界的に高い評価を受けていた。通夜・告別式は家族と関係者で執り行う。

- ◆◆◆
- ▼通夜 7月29日(土)13時～
- ▼葬儀 7月30日(日)18時～
- ▼式場 藝術會館 平山記念ホール

の1%が消失していたことが、国土庁の調べで分かった。政府は、沖ノ島、南鳥島の護岸工事を急いでおり、明日、高峰国土相が現地を視察する。

作品・肖像・式場地図等はデジタル版でご覧になれます。



\* R E I T A N I Y A M A D I E D \*

新毎朝新聞社デジタルアーカイブ

その訃報は、新聞に載ったもののほとんどの人の目に留まることはなかった。しかし、とある業界には衝撃をもたらし、多くの人を悲しませたのだった。

都内某所。稀代の油彩画家として多くの蒐集家を魅了した谷山怜の告別式が開かれていた。喪主は妻の谷山深里。列席者は親族と案内状を送った人たちのみで、用意されている椅子の数も三十に満たない。これは妻が目立つことを嫌った怜の性格を汲んだからだ。しかし、招待者同士がお互いのことを知らないというのはまた珍しい。中には何十年も怜と会っていない人も招待されていた。それは故人の意向によるところが大きいだろう。

「この度はご愁傷様でございます」

「お忙しいところありがとうございます。お預かりいたします」

一人目の弔問者は川上大吾という白髪の老人だった。深里の知らない招待者で、女性を一人連れてくる。奈央、名刺を

「恐らく奥様は僕のことをご存じないでしょう。奈央、名刺を」

深里の目をまっすぐに見てそう言った老人は、歳を感じさせないエネルギーを持っていた。

「奥様、このような場で失礼かとは思いますがこちらを」

差し出された名刺には『川上航空研究所所長 川上大吾』と記されていた。

「詳しい話は弔辞でさせていただくとしましよう」

川上所長はそう言い、しつかりとした足取りで会場へと向

かっていった。

川上所長は伝えていた時間よりも早く来たようで、次の招待客が来るまでにかなり時間が空いた。受付で待つ深里は今日の招待者の中でそのほかの自分の知らない人物のことを考えていた。一人は住所が海外にあり、名前も日本人に見られるものではないのだ。怜がどのように出合い親交を深めたのか深里はとても疑問に思っていた。

「母さん」

思索にふけっていた深里は、息子の英一に声をかけられた。

「猫って飼ってたっけ」

ひよいと椅子が並んでいる会場を覗いた深里は整然と並べられたうちの一つの上で丸くなっている一匹の白猫を見た。

「いいえ、飼ってないわ。でも、ええ、そのままでもいいんじゃないかしら」

「ならいいか」

その猫はおとなしく、英一が近づいていっても逃げる様子はなかった。

「こんにちは。怜の安らかな眠りをお祈り申し上げます」

二人目の弔問者は先ほどまで考えていた外国人だった。服の上からでも分かる筋肉質な体は若々しさを感ぜさせるが、皺の目立つ顔と、白髪は中年期を過ぎた男性のそれだった。アジア訛りの日本語は拙いながらも悲しみの滲む声だった。

「ありがとうございます」

「ばかやろう、父ちゃんなんか大っ嫌いだ！」

そう言い捨てて、大吾はアパートを飛び出した。大吾の後ろで、安普請の扉が派手な音を立てて閉まった。鉄の階段を駆け下りて夜の中へ飛び出すと、少し冷たい風に肌を撫でられる。風は程よく冷たいのに、昼間まで降っていた雨のせいで空気がじっとり皮膚にまとわりつくようで不快だった。

ばかやろう、と大吾は走りながら心の中でまた父親をなじる。ばか、ばか、薄情者！ そう繰り返していると、脳裏に思い浮かぶのは母の姿だった。

大吾の母は優しい人だった。甘いばかりの人ではなかったけれど、その実心の底から一杯に大吾を愛してくれていたのを知っている。小学校の入学式の日、大きくなったわねと目を細めたこと、徒競走で一着になったとき、すごいじゃないと言つて頭を撫でてくれたこと、ライバルの良夫と喧嘩して痣と絆創膏だらけになった大吾を、泣かせるほど叱ったけれど反面すごく心配してくれていたこと。母はいつも温かくて、大吾はそんな母が大好きだったのだ——大好きなのだ、今でも。

父も大吾と同じ気持ちでいると思っていたのに。父と母と大吾の三人が家族なのに——それなのに、父はどうして他の女の人と家族になろうとするのだ。

母が亡くなったのは二年前、大吾が三年生のときのことだ。その半年ほど前に癌が見つかり、しばらく入院していたが、回

復することなくそのまま病院で死んでしまった。平日の昼間だったので、学校にいた大吾は担任の先生の口から母の死を知らされた。聞いた瞬間に頭が真っ白になって、そのあとの先生の言葉なんて全く頭に入ってこなかった。覚悟なんか全然できていなかった。母の死が、そんな風に他人の口から伝えられるとは思ってもみなかったのだ。どうして母は、せめて学校が終わるまで待っていてくれなかったのか、と思った。

病院に着いた大吾に、担当だった看護婦から母の言葉が伝えられた。

『いつでも空から見てるからね』って、お母さんが

大吾はそれから二年間、片時も母を忘れることはなかった。もちろんいつまでも嘆き悲しんでいるわけではないけれど、母は亡くなっても大吾の、そして父の家族であり続けている。だから大吾はあんな話をした父のことが許せないのだ。

『大吾、来年の春からおまえに新しい母ちゃんができるぞ』『おまえも母ちゃんがいいた方がいいだろう？』

——最低だ！ 先程の父の言葉を思い出すだけで腸が煮えくり返ってきた。路上の空き缶を蹴飛ばすと電柱に当たって跳ね返ってきたので、こんどは踏みつけて潰してやった。ちっとも気分は晴れなかった。

ひしゃげた空き缶に片足を置いたまま肩で息をしていると、不意に誰かの声がしたので、大吾の心臓は跳ね上がった。

そこはおそらく、見慣れたはずの大学のキャンパスだった。法学部や政治経済学部の校舎が立ち並んでいる。まだ少し寒い風が吹いているのにもかかわらず、太陽の光が力強く降り注いでおり、学生たちは日陰に避難していた。

譲はふと校舎へと向かっていた足を止める。そして、前から歩いてきた長身の男子大学生に声をかけた。

「谷山」

谷山と呼ばれた青年は驚いたように譲の方を見る。彼の着ている薄手のコートの裾が、ふわりと揺れた。

「……芹沢先輩？」

「やっぱり谷山だ。久しぶり」

譲は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「先輩は、どうしてここに」

谷山は譲とは対照的に、少し困惑している様子だった。表情は堅く、瞳は何とも言えない、悲しみや不安に沈んでいるように見える。

「僕もここに通ってるんだよ。キャンパスで高校の知り合いに会ったのは初めてだけど。谷山は美大に行ったと思ってたから、びっくりした」

——確か、僕はここに通っているはずだ、うん。

不思議とふわふわとした感覚がして確証は持てなかったけれ

ど、きつとそうだと譲は思った。

「俺はもう、絵は辞めたので」

「どうして」

「……描くべきではないと、思ったので」

谷山は口の中で呟くように言って、足早に歩き去ってしまった。取り残された譲は、一人彼の後ろ姿を見つめることしかできなかった。

谷山は譲の一歳下で、高校の後輩だった。彼は、譲が知る中で一番絵が上手かったと思う。譲は当時美術部に所属していて、部員ではなかったけれど放課後美術室に出入りしていた谷山とは、そこそこ仲がよかった。

初めて出会ったのは、谷山の入学式の日だった。彼は、入学式をさぼって美術室で絵を描いていたのだ。その日二・三年生は授業がなく、譲は美術室に忘れ物を取りに来ていた。そんな時、彼を見つけた。

鍵を穴に差し込もうとすると、すでに扉は開いていた。部屋の中を覗き込むと、一人の少年が、キャンパスに向かい合いながら窓辺に座っている。彼は艶のある長めの髪を下ろしていて、前髪から覗く瞳は新月の夜を流し込んだように真っ黒だった。彼のことは全く知らないのに、その真剣な目からは絵を描くことが本当に好きなのだろうということが見て取れた。

やけくそで買ったブラックコーヒーを、非常階段から放り投げる。

口の中に残る苦さは、大人になれない自分を否応なく突き付けてきて、カイは一層みじめになった。もつとも、彼女とのことは、彼の幼さが原因だったわけではない。それ以前の問題である。

十三階の非常階段にも、青々と茂る蔦が絡みついていて。見上げると、屋上まで緑が続いている。かつては、貪欲に太陽を目指すその姿に勇気づけられたこともあったが、今は何もかもが彼を嘲笑っているかのように感じられて、目の前の蔦を力任せに引きちぎった。

国境に近いスラム街にある、建造途中で廃棄された雑居ビル。その十三階に、彼の秘密基地があった。ここからは、風化する街、国境の海と、その向こうにどこまでも続く中国大陸が一望できる。

もちろん、彼女の母国は見えなかった。



一目で、香港在住イギリス人だろう、と分かった。

まるで光そのもののような金髪。透き通った碧い目。自分と同じ人間とは思えない、陶器のような肌。

シックな制服姿の少女は、毎週水曜日の午後になると決まっ

て、スラム街の南にある新市街の郵便局に姿を見せた。顔なじみの局員と雑談しながら、時おり何か尋ねているようだった。カイもまた、毎週水曜日には勤め先の工場のお使いで、郵便局を訪れていた。

上品な美しさと、年相応の澁刺とした表情のギャップに、好意を抱くのにさほど時間はかからなかった。膨れ上がる片想いに、振られた方がまだマシという気分になり、ついに一か八かで告白してみることにした。彼女が英語を話すことは知っていたので、「I love you」だけは練習した。

そして、郵便局から出た彼女に話しかけてみたのが、つい数時間前のことである。

会話は、こんな感じだった。

「すみません、ちょっといいですか」

「〇×？ ○△□▼×……」

振り向いた彼女は怪訝そうな顔をして一言呟いた後、申し訳なさそうに何やら話し出した。カイは、そこでようやく「love you」しか覚えてこなかった自らの失策に気づいた。何を言っているのか分からないのである。

「……□▲○？」

彼は、くると背を向けて駆け出した。恥ずかしさで、無くなってしまいたい気分だった。これが、彼の失恋ともいえない失恋の顛末である。

## 1・休日の公園に潜むものは

パリの朝は肌寒い。霞んだ朝霧の下に白飛びした風景は、他人事のように不思議と安心する。世界の外側から人々を眺めているような、自分という小っぽけな殻を気にしなくてすむような。これを筆で落とし込むのが僕の休日のささやかな喜びだ。『……………この間の××邸の水彩画、色使いが繊細で非常に素敵でしたわ。教授から成績もお聞きしました、勉強にも励んでいて素晴らしいことと思います。次回の作品も楽しみにいたしております。それではお体にお気を付けて。』

敬具

M

昨日届いたばかりの手紙の文面を反芻する。ここ最近研究室での実験が続いていたせいではらく絵筆を握れておらず、右手が疼いて仕方がない。今日は大学は休み、天気もいい。絶好のスケッチ日和だ。

朝露がきらきらと反射する。僕のいつもの散歩コースであり、スケッチを楽しむ場であるこの公園は、やや広く、郊外に位置する。長めの遊歩道は近所の人たちもよく散歩に使うし、噴水や水場では子どもが遊び、東屋にはベンチに座るカップルの姿が見られる。

遊歩道の傍らを歩いていると、によきによきと色んな種類の木が何本も生えている。朝の清涼な雰囲気にはちよつと不釣り合いで面白い。うん、今日はここにしよう。反対側の斜面に

シートを敷き、腰を下ろす。

画材道具を広げ、スケッチブックを開く。目の前で奔放に枝を揺らす木々をどう一枚の平面に落とし込むか。画材の中からいっとう使いこまれた柔らかい芯の鉛筆を取り出し、徐に白紙のページに乗せてみる。するとあれこれ思案していた頭の中の糸がすつとひとつに纏まり、自然と引くべき線が見えてくる。それに従って手を動かせば、画面いっぱい風景が満ちる。紙を捲る。もう一枚。

日がどんどん高くなり、霧がすっかり晴れた後も僕は黙々と鉛筆を動かし続けた。

そうしてどのくらい画面に没頭していただろうか。ふと視線を感じぐると辺りを見回すと、背後にによきりと伸びた二本の黒い細木があった。いや、木ではない。先程までここに木なんか生えていなかったはずだ。よく見るとそれは紺地のざらついた生地をしていて、下には根っこではなく擦り切れた大きなスニーカーがついていて、幹ではなく着古したジーンズで、人の足だった。瞬間、僕は思わず絵筆を取り落としそうになった。己が絵以外の表現方法が拙いことを踏まえた上で敢えて例えてみるなら、椅子だと思つて座っていたのが実は巨大な亀の甲羅だった時の気分だ。

その男は僕より随分と背が高いというほどではなかったが、見下ろされていることを意識したら全く安心できるものではな

廊下を歩く荒い足音が、心地よい微睡<sup>まじろ</sup>みを覚ました。

足音は部屋の前で止まり、すぐにドアを乱暴にノックする音が聞こえてくる。

「いつまで休んでいるつもり？ あと三十分もしないうちに来客があるのよ」

「……今行きます、真衣さん」

真夏の白昼。気怠い身体をベッドに投げ出すようにして眠っていた深里は、ゆっくりと起き上がった。ベッドサイドテーブルに置かれた時計を見やると、時刻は一時を数分過ぎていた。昼休みは十二時から一時までと決まっているのだから、真衣が怒るのも無理からぬことだった。

ドアを開けると、腕を組んだ細身の女が立っている。きりりと吊り上がった瞼と固く結ばれた唇が、ただでさえきつい顔立ちを陰しくしていた。

「早く」

真衣が階段を顎で示して命じた。

「ぐずぐずしてるんじゃないわよ」

「申し訳ございません」

目を伏せて謝り、真衣の傍らをすり抜ける。ふと顔を上げた瞬間、その横顔に歪んだ微笑を見た。時折、真衣が深里に向けてくる表情だ。優越感を剥き出しにした、勝ち誇ったような微笑み。それを見るたびに深里は、不快感や苛立ちよりも奇妙な不可解さを覚える。

貿易会社社長の跡取り息子の妻と、家政婦。あまりにも立場がかけ離れ過ぎていて、同じ土俵に立ってすらいない。真衣がわざわざ深里を見下して優越感に浸るのは、滑稽に思えて仕方がなかった。

ひょつとして年齢が近いからだろうか。同年代の女どうしなのに、自分の方が明らかに上に立っているという事実が、真衣を勝ち誇らせているのかもしれない。深里は階段の踊り場で立ち止まり、すぐ傍の壁にかかる楕円形の鏡に目を向けた。

ぼんやりとした覇気のない女の顔が、見つめ返してくる。顔立ちそのものは整っているのに、空虚な生き様が顔に現れてしまっていた。

近づいて鏡を覗き込む。

老け込んではいないが、かといって若々しさと瑞々しさに溢れているわけでもない顔。この顔が年相応であるならば、私は二十七の真衣とそう変わらない年齢である……はずだ。

足元がぐらりと揺らいだような気がして、深里は目を閉じた。

まただ。自分自身のことには思いを巡らせるたびに、この感覚に襲われる。自分という人間が何者であるか、形作るものがないという事実を突きつけられる。確かなのはただ一つ、北原深里という名前だけだ。

「深里さんッ！」

突然降ってきた真衣の声に、深里は我に返った。見上げると、階段の上で真衣が仁王立ちになっていた。

「やっぱりそういう結果だよな……」

リシャトー株式会社 営業二課の課長 島崎は、二〇〇五年第一四半期の個人営業成績表を眺めながら苦笑いを浮かべた。認めたくなくて、何度も売り上げをチェックしたが、結果は変わらなかった。

成績第一位はとある若手社員だった。次点の社員の倍近い売り上げだ。間違いなく彼は二課のエースだったが、月末までは次点との差はこれほど開いていなかった。——こんな成績になったのには、わけがある。

「城内さん！ 二課の成績、見ていただけましたか？」

件の若手エースが嬉しそうな声をあげるのが聞こえた。

「ええ、見たわ。一位おめでとう」

「ありがとうございます。でも、そんなことより！ 城内さんが持つてきてくれた物件のおかげで、グラフこんなですよ！ 見たこともない数値です！」

「ずるいなあ。城内さん、次のは僕に回してくださいよ」

小太りな中堅社員も会話に加わってくる。

「あら、あなたには前回やつてもらったでしょう。順番よ。それに、誰に回すか決めるのは島崎君の仕事だから。ねえ、島崎君？」

呼ばれた島崎は、曖昧な返事をしつつ、恐るおそるそちらを見る。

ベージュのパンタロンスーツに身を包んだ、背の高い女性が

島崎の方に顔を向けていた。端正な顔立ちに、縦ロール風のパーマがかかった艶やかな黒髪。キリリと上がった眉と力強く輝く瞳は、いかにも仕事ができる女性といった感じだ。事実、彼女は異常なほど仕事ができた。

城内 静香、四十五歳。不動産ベンチャー「リシャトー」を立ち上げた、超やりの女社長。島崎より二つ年上だが、最近髪が薄くなってきた彼より、澁刺としていてよほど若く見える。そういった人間としての格の違いをひしひしと感じさせるあたりが静香を畏怖の対象に仕立て上げ、一部で神格化させていたが、今島崎が最も恐れているのは、彼女のワーカホリックぶりだった。

もともと、ベンチャーで自由な気風の会社であったため、静香が下の方の業務まで度々口出ししていた。そして、その口出しが会社の利益に多分に貢献するため、社員達が嫌がったりするようなこともさしてなかった。むしろ、スーパーウーマンの社長の手法を学べると歓迎する者達が多かったくらいだ。島崎もこれは悪いことではないと感じていたため、二課の扱う中古住宅流通に初めて静香がアドバイザーをくれた時は喜んで受けた。リノベーション事業にも手を広げようとする姿勢には感銘を受けた。

しかしながら、ものには限度というものがある。中古住宅の魅力に気づいてしまった静香は、趣味と称して自ら物件を探し、気まぐれに二課へ持って来るようになった。一步間違えれば有



どこの海かは知らない。ただ、海といって頭に浮かぶのは決まってその風景だ。

画面をほぼ覆いつくす錯落とした青。それに、二本ばかりのヤシの木と白い砂浜が添えられている他は何もない。打ち寄せた浪すら省かれている。

玄関に取付けられたこの絵画を見て、俺は育った。実際に海を訪れたことはあっても、小さい頃からの刷り込みはやはり大きい。淡白で、無生物的で、どこかやさしい。俺にとって海とは、そういうものだった。

しかし、段々と背が伸び、その絵を間近で見られるほどにまじまじと見たとき、かの青が荒い絵の具の膨らみでつくられていることを知った。がっかりしたわけじゃない。ただ、少量の砂を噛んだようにざらざらとした気分がした。

近頃の心の状態はそのとき覚えた味に似ていた。父さんと微妙な距離感になってしまったのも、きつとその所為だったのだろう。俺の精神状態が悪さをしたのだ。

けれども全てが落ち着いた今となっては、すれ違いから始まったこの一連の出来事が、俺自身のためにも、ひよっとすると家族のためにもよかったのかもしれないと思っている。

大元のきっかけは、震災の被害を伝える写真展に行つて以来、俺が若者らしく、写真に触発されたことだった。復興のためのボランティアを志すような、立派な衝撃を受けたのではない。生まれてこの方、否応無く目に染み付いてきた父親の風景

画よりも、そこで整然と並べられていた写真の方がナマに見えたのだ。新聞記事を読み漁ったあとで、文庫本を持ち上げたときに生まれる一瞬の間のような、落差を覚えた。行った当時は高校に入学したてだったことも、影響したかもしれない。何かしら意味のあることをしたいという観念が頭をもたげてくる時期だった。同時に、評価の高いらしい父の画に対して叛旗を突きたててやることに憧れてもいたのだろう。あの飄々としたものたちに対して。

家にある父の作品は、玄関の「海」とリビングの「森の幸」の二つだった。それ以外にも色々と見る機会があったが、過ごしてきた時間はこの二つが一番永い。どちらにも人は居ない。風景ばかりがある。

この傾向は家全体の雰囲気にも現れていた。家の中で人の息遣いを感じさせるモノは、リビングの棚に飾られた数葉の家族写真のみだ。両親の若い頃のものや俺が小さかったときのものなどがある。だが、その内に俺と父さんが一緒に映り込んだものはなかった。そんな二人の思いが今になってようやく交錯したわけだから、多少反発し合うのも無理はない。母さんには、悪いことをした。

その小さな不和が始まった日というのは、夏休みも盛りの中の月中旬頃のことだった。

俺が休みになると、創作期の父さんのルーチンが変わらない。朝九時半ごろになると家を出て、日が暮れる頃によく

「うちのひとの絵を見に来ませんか？」

はじまりはその一言だった。その一言だけで十分だった。

救いというのはたぶん、そんなあっけない奇跡のことを言うのだと思う。

先日のことだ。

それまでわたしにとって何よりも大切だったはずものが、これっぽっちも大切だとは思えなくなってしまった。きっかけは特になかった。なかった、と思う。

わたしの人生、ほとんどそれだけのためにあるようなものだったから、その出来事には心底おどろかされた。本当に天地がひっくり返ったみたいだった。

それがあったから、今までなんとか生きてこられたのだ。なくなってしまうなんて一度も疑ったことがなかった。そのくらい、あたりまえの神様だった。

なのに、突然その光が見えなくなってしまった。大切だと思っていた理由も、大切だった頃の気持ちも、まったく思い出せなくなった。光が消えてしまったのかもしれない。あるいはわたしの眼が盲目になってしまったのかもしれない。でもきつと、答えはその両方なのだろう。

気づいたときには、なにが大切で、なにが大切でないか、もう自分では決められなくなっていた。視界がぼんやりとぼやけるようになった。なにを見ても、なにを聞いても、浮かび上

がってくる感情がぜんぶ一緒だった。

色んなことがだんだんどうでもよくなった。

からだのなかがどんだん空っぽになっていくのがわかった。理由は分からないけれど、なんとなく、水ばかりをがぶがぶ飲むようになって、トイレばかり行きたくなくなった。

仕事には、もちろん行かなくなった。

無断欠勤の三日目に、上司に「辞めます」とメールだけ打った。なんの返信も来なかった。こんなものだったのかと、しばらくのあいだよくわからない感情におそわれた。

それまでのわたしは、本当にずっと仕事漬けだった。朝から晩まで、仕事のことだけを考えて生きていた。それが、生きがいだと信じていた。だから趣味なんていう大それたものもなく、仕事をやめた途端、本当に何もすることがなくなった。生きていくだけだと、こんなにも一日は長いんだなと思った。

あまりに暇だったので、わたしは仕方なく、毎日毎日散歩ばかりしていた。一日かけて何駅も先まで歩いた。バッグの中に財布と水だけを持って、何も考えず、ただひたすら足を動かした。自分が住んでいる街を、はじめてちゃんと見た気がした。

どうしてこんな風になってしまったんだろう、と考えることはもちろんあった。

時間をかけて、原因をいくつか思い浮かべてみたりもした。